

正史を彷徨う

二十三章 安閑天皇紀から崇峻天皇紀

森隆一



欽明天皇陵 (Google Map)

23.1. 安閑天皇から聖武天皇までの陵と宮

表 23.1. 安閑天皇から聖武天皇までの陵と宮

安閑天皇	河内舊市高屋丘陵	羽曳野市	勾金橋宮	橿原市
宣化天皇	大倭國身狹桃花鳥坂上陵	橿原市	桧隈廬入野宮	明日香村
欽明天皇	桧隈坂合陵	明日香村	磯城嶋金刺宮 (難波祝津宮) (樟勾宮) (泊瀬柴籬宮)	桜井市 大阪市 枚方市 桜井市
敏達天皇	河内磯長中尾陵	太子町	百濟大井 譯語田幸玉宮	桜井市 桜井市
用明天皇	河内磯長原陵	太子町	磐余池邊雙槻宮	桜井市
崇峻天皇	倉梯岡陵	桜井市	倉梯柴垣宮	桜井市
推古天皇	磯長山田陵	太子町	豊浦宮 (耳梨行宮) 小墾田宮 (斑鳩宮)	明日香村 橿原市 明日香村 斑鳩町
(聖徳太子)	磯長陵	太子町		
舒明天皇	忍坂内陵	桜井市	飛鳥岡本宮	明日香村
皇極天皇	齊明天皇		飛鳥板蓋宮	明日香村
孝徳天皇	大坂磯長陵	太子町	難波宮	大阪市
齊明天皇	智崗陵	高取町	飛鳥板蓋宮 飛鳥川原宮 飛鳥後岡本宮 飛鳥田中宮 朝倉橘広庭宮	明日香村 明日香村 明日香村 橿原市 朝倉市
天智天皇	山科陵	京都市	近江大津宮	大津市
弘文天皇	長等山陵	大津市	近江大津宮	大津市
天武天皇	檜前大内陵	明日香村	飛鳥浄御原宮	明日香村
持統天皇	檜前大内陵	明日香村	飛鳥浄御原宮 藤原宮	明日香村 橿原市
文武天皇	桧隈安古山陵	明日香村	藤原京	橿原市
元明天皇	奈保山東陵	奈良市	藤原京 平城京	橿原市 奈良市
元正天皇	奈保山西陵	奈良市	平城京	奈良市
聖武天皇	佐保山南陵	奈良市	難波宮 平城宮	大阪市 奈良市

表 23.1 は表 19.1 の続きとして作成したものである。表 23.1 からは、欽明天皇から崇峻天皇までの宮は桜井市にあり、こちらは飛鳥に含まれな

いようだ。

藤原京の南の明日香村の地域を明日香、橿原神宮・藤原京辺りの地域を藤原と呼ぶことにする。桜井市は、一応、宮の地名の多いものを取り、磐余と呼ぶことにする。Wikipediaの両者の記事を引用する。

Wikipedia「磐余」

磐余とは、奈良盆地桜井市中部(阿部・池之内)から橿原市南東部(池尻)にかけての古地名。天香具山北東山麓を指す。石村・石寸とも表記する。

神武天皇の和風諡号、神日本磐余彦天皇の中にこの地名が含まれ、天皇の東征の際に、兄磯城の軍が磐余邑に駐屯していたことが見える。

古くから皇居が営まれてきたところで、神功皇后の磐余若桜宮、履中天皇の磐余稚桜宮、清寧天皇の磐余甕栗宮、継体天皇の磐余玉穂宮、用明天皇の磐余池辺双槻宮が置かれてきている。5世紀から6世紀にかけての大和政権の政治の中心地で、履中天皇の時代には磐余池が築造されている。万葉集巻第三には大津皇子の辞世の句が詠まれており、歌枕でもあった。

Wikipedia「初瀬」

初瀬は、奈良県桜井市の地名。古くはハツセと呼ばれ、泊瀬とも表記した。初瀬山には西国三十三所第八番の長谷寺がある。

泊瀬の名は、万葉集巻7-1095に見ることができる。

三諸つく三輪山見れば隠口の泊瀬の桧原思ほゆるかも

この場所は大和川が東から大和盆地に流れ下る川口にあたり、船舶による運搬が主だった上古の時代の船着場(=泊瀬)でもあった。これより上流は三輪山の南麓を東西に流れる隠遁とした長い谷となっており、万葉の歌はこの様子を詠んだものである。

泊瀬は東国との交通の要衝でもあり(初瀬街道)、古代の皇室が支配していたとされる土地である。後述の天皇の宮の他、御名入部である長谷部は、のちの飛鳥時代の皇族の諱に見られる。

泊瀬朝倉宮：第21代雄略天皇が、当地に泊瀬朝倉宮を置いたとされるが、その所在地は考古学的には確定していない。宮の場所については古くから2つの説があり、帝王編年記などは磐坂谷(桜井市岩坂)、大和志などは天の森(桜井市黒崎)とするが、立地条件などから、どちらの場所も宮の所在地としては疑問視されている。黒崎の白山神社境内にも泊瀬朝倉宮伝承地の碑がある。また、桜井市脇本の脇本遺跡も泊瀬朝倉宮跡の有力な候補地とされ、1984年には5世紀後半のものと推定される掘立柱穴が発見されている。

泊瀬列城宮：第25代武烈天皇は、初瀬から少し下った出雲に泊瀬列城宮(古事記では長谷之列木宮)を置いたとある。この地の十二柱神社に武烈天皇泊瀬列城宮跡の石碑が残る。

陵や宮は○○△△宮(陵)で書かれている。継体天皇紀までに現れる○○の幾つかを主として地図にしてみた。

赤文字で書かれた地名は表 19.1 に挙げられている陵と宮のうち地図上で特定できたものであるここで、○○△△宮(陵)は○○のみを記入した。○の○のない△△宮(陵)はそのまま記入した。

青文字書かれた地名は表 23.1 に挙げられているものである。ただし、飛鳥△△宮(陵)は数が多いため除いた。これらは、推古天皇の(飛鳥)豊浦宮・舒明天皇の飛鳥板蓋宮・斉明天皇の 4 力所の飛鳥△△宮と、天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮であり、黒字の飛鳥辺りに位置している。

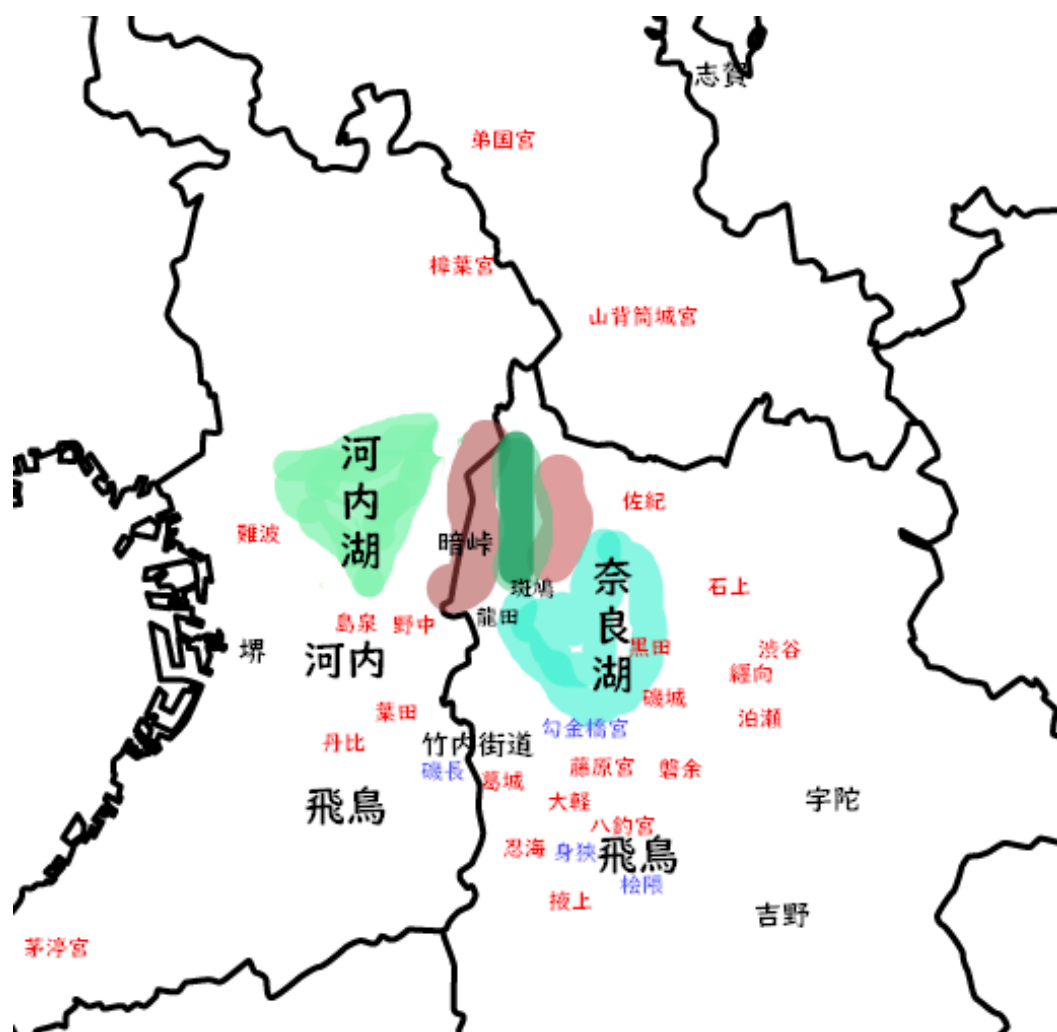


図 23.2. 継体天皇までの宮の分布

ここで、図 23.2 で河内湖と奈良湖に挟まれた塗りつぶしの部分を説明する。まず、左側の茶色の部分が生駒山地、右側の茶色の部分は丘陵地で、矢田丘陵というらしい。中の緑の部分が谷筋となっている。ここには、竜田川が流れていて、生駒と王寺を結ぶ近鉄生駒線が縦貫している。行政的には、北側は生駒市で南側は平群町となっている。この谷筋の名前がわからない。わかるまでは、竜田川流域か生駒谷と呼ぶことにする。生駒線の沿線は、YouTube で、‘近鉄生駒線’で検索すれば、全面展望のサイトが多数見つかる。

地勢的に見て、竜田川流域は古代人に住みやすい所であったと思われる。一方、表 19.1・表 23.1 には、平群・生駒はない。これは、倭王にとっては住みこごちが良くなかったのだろうか、あるいは、直轄地にできなかったということかもしれない。

図 23.2 に書き込めなかったことを補足しておこう。書きかかったのは大和川である。この大和川の奈良県側の最後に龍田があり、龍田大社は三郷町にある。一方、大阪府側の最初は柏原市でこの南部一帯が河内飛鳥(近つ飛鳥)で古市古墳群がある。江戸時代に大和川がかけ替えられる前は、大和川は北上し、河内湖を流れていた。

河内湖の水深が問題であるが、航路を選べば、柏原市辺りまで(瀬戸内海を渡ってきた船で)遡上できたと考えている。

ここで、最近覚えた地理院のサイトで利用できる、‘自分で作る色別標高図’を用いて次図を作成した。

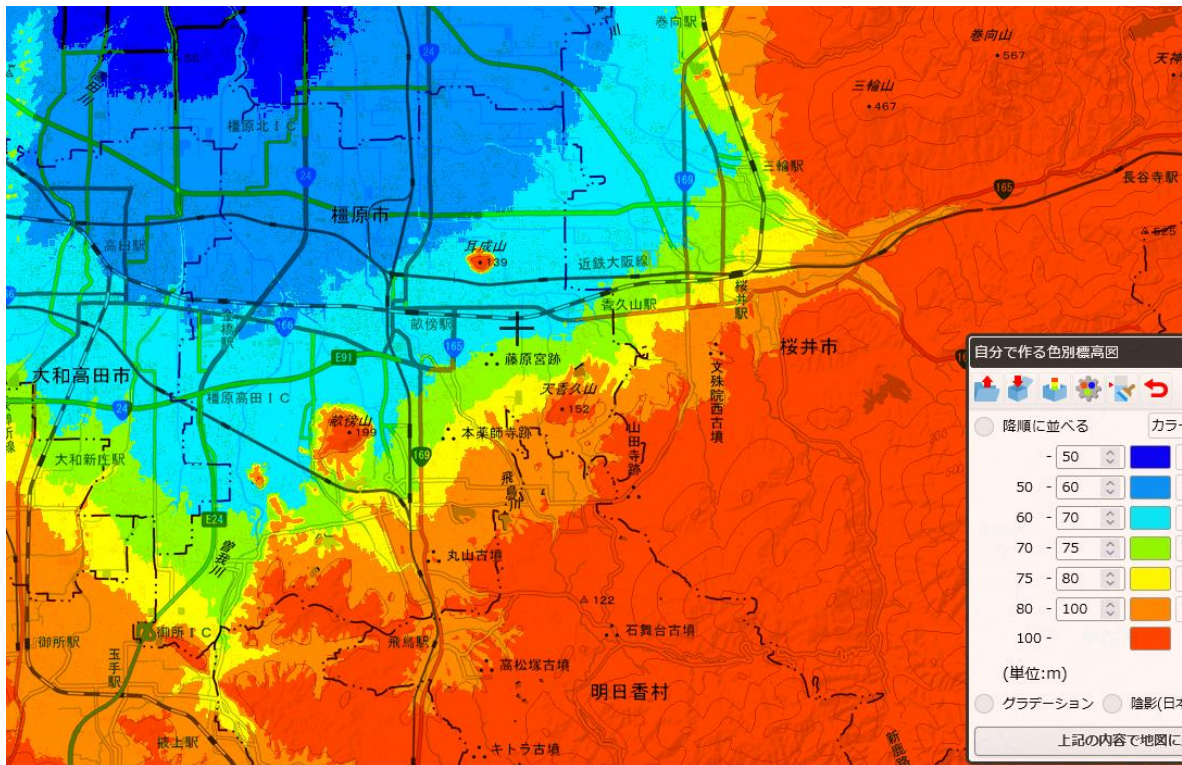


図 23.3. 飛鳥・藤原京周辺の色別標高図

しばらく試行錯誤の後、上の図に至った。図の中央部分に、畝傍山・耳成山・天の香久山が見られる。この三山が囲む三角形の右側部分に藤原宮、三角形の外側の下、オレンジ色の部分に飛鳥宮があり、畝傍山の周辺

に神武天皇陵・綏靖天皇陵・安寧天皇陵と橿原神宮がある。これから、藤原京と3陵は同じ時期に造られたのではないかということが思い浮かぶ。次稿での検討課題としたい。他に、右下の大官大寺が目にとまる。

かしはら探訪ナビ> [「大官大寺跡」](#)では、

大官大寺は飛鳥・藤原地域で建立された古代寺院の中では最大の寺院ですが、現在は、香具山の南麓に広がる水田の中に碑が建ち、その位置が分かるのみです。

大官大寺は、舒明天皇が発願した百濟大寺を天武天皇の時代に移築・改称されたとされています。しかし、出土遺物から見る限りでは、主要伽藍は全て藤原宮が営まれた時期でも後期に造られたことが明らかで、文武天皇の時期に金堂を創建したと記す扶桑略記の記述を裏付けています。

なお、大官大寺は金堂→講堂→塔→中門・回廊の順で造営されましたが、その完成を待たず、西暦711年(和銅4)に火災によって焼失した事が扶桑略記に記されています。発掘調査では、金堂と中門の垂木が焼け落ちて地面に突き刺さった後も燃えていたことがわかり、火災のすさまじさを私達に伝えてくれています。

と書かれている。上の説明から、平城京の西の京のようなものかと思った。

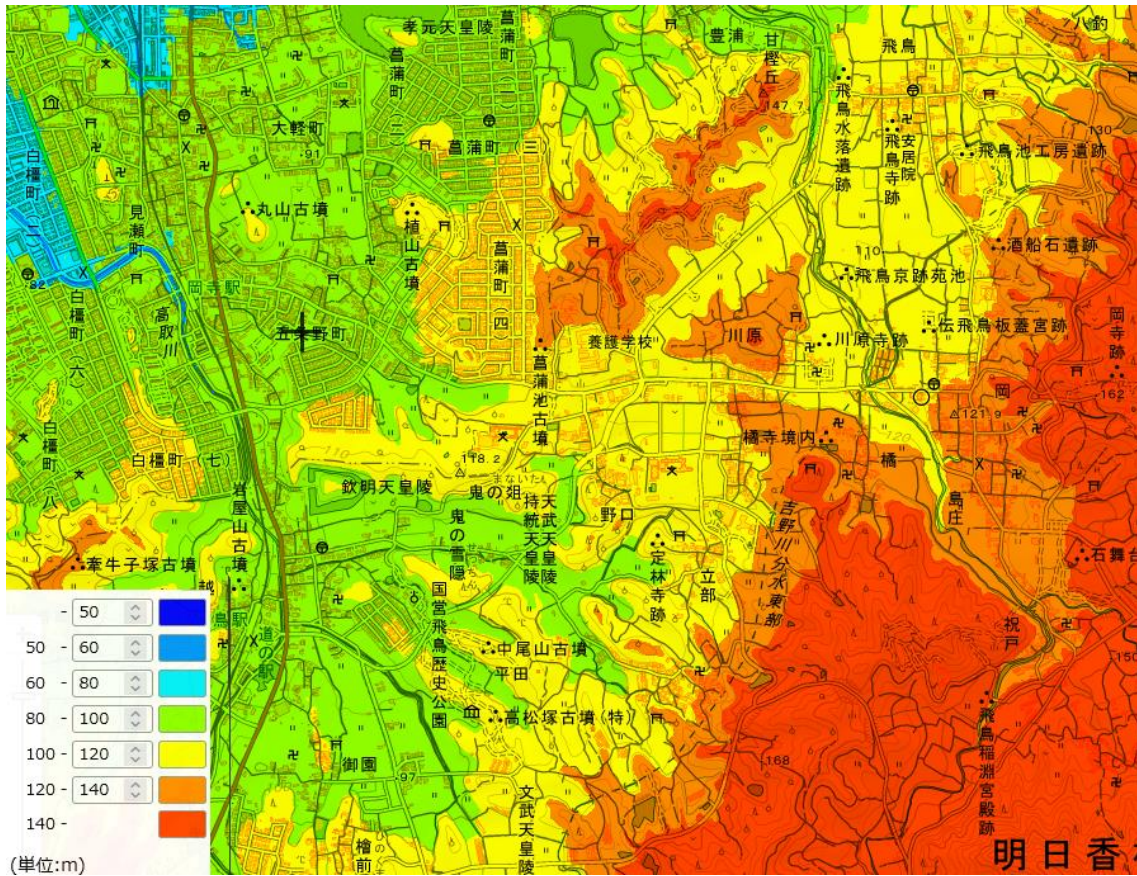


図 23.4. 明日香の色別標高図

図 23.4 で覚えた直後に作成したもので、色分けは図 23.4 とは異なっている。殆どが標高 100m-120m の黄色の地帯に位置している。薄い緑の地帯にあるのは、孝元天皇陵と欽明天皇陵である。

ここで、地理院地図についての感想を述べておく。

図 23.4 の縮尺では本稿に必要な史跡が殆ど書き込まれているが、地勢の概略はわからない。19 章の各天皇陵の地図は、図 23.4 と同縮尺のものである。一方で、図 23.3 では大勢は見られるが、史跡は書き込まれていない。両図を比べれば、長さ比が 5 程度である。

自分で作る色別標高図では、標準地図を消去できる。これに図 23.2 のように、宮や陵を記入した図が有効 Fire と思われるが、これには Fire Alpaka の操作の向上と、そのうえで、作成にかなりの時間を要する。

23.2. 安閑天皇紀 勾大兄廣國押武金日天皇

前文は 137 文字と短い。

👉 継体天皇の長子で母は日子媛という。 男大迹天皇長子也 母曰日子媛

👉 継体天皇は大兄を天皇と為し、その日に崩じた。この月、従前のごとく、大伴金村大連を大連に物部麿鹿火大連を大連とした。

男大迹天皇廿五年春二月 男大迹天皇立大兄爲天皇 即日男大迹天皇崩 是月 以大伴金村大連爲大連 物部麿鹿火大連爲大連並如故

大連が 2 人である。

👉 元年正月 大倭国の勾金橋に遷都した。それを宮の号とした。

遷都于大倭國勾金橋 因爲宮號

👉 三月 億計(仁賢)天皇の女の春日山田皇女を薦めるものがあり、皇后とした。 有司爲天皇納采億計天皇女春日山田皇女爲皇后

👉 四月 内膳卿の膳臣大麻呂は、勅を奉じて、伊甚に珠を求める使者を派遣した。伊甚国造らは京に詣で……。には伊甚屯倉成立の話が書かれている。

内膳卿膳臣大麻呂 奉勅 遣使求珠伊甚 伊甚國造等詣京遲晚 踰時不進 膳臣大麻

呂大怒收縛國造等 推問所由 國造稚子直等恐懼 逃 匿後宮内寢 春日皇后不知直入
驚駭而顛 慚愧無已 稚子直等兼坐闖入罪當科重 謹專爲皇后獻伊甚屯倉請贖闖入之
罪 因定伊甚屯倉 今分爲郡屬上總國

☞五月 百濟は下部脩徳の嫡徳孫と上部都徳の己州己婁らを派遣し、いつも
のように調を貢いだ。・・・

百濟遣下部脩徳嫡徳孫 上部都徳己州己婁等 來貢常調 別上表

☞十二月 三嶋に幸した。 行幸於三嶋

☞二年 四月 勾舍人部と勾靱部を置いた。 置勾舍 人部 勾靱部

☞五月 筑紫に穂波屯倉と鎌屯倉、豊国に□碕屯倉・桑原屯倉・肝等屯倉・
大拔屯倉・我鹿屯倉、火国に春日部屯倉、播磨国に越部屯倉と牛鹿屯倉、
備後国に後城屯倉・多禰屯倉・來履屯倉・葉稚屯倉・河音屯倉・婀娜國膽
殖屯倉・膽年部屯倉、阿波国に春日部屯倉、紀国に經湍屯倉・河邊屯倉、
丹波国に蘇斯岐屯倉、近江国に葦浦屯倉、尾張国に間敷屯倉と入鹿屯倉、
上毛野国に國緑野屯倉、駿河国に稚贄屯倉を置いた。

置筑紫穂波屯倉 鎌屯倉 豊國□碕屯倉 桑原屯倉 肝等(取音讀)屯倉 大拔屯倉 我
鹿屯倉(我鹿 此云阿柯) 火國春日部屯倉 播磨國越部屯倉 牛鹿屯倉 備後國後城屯
倉 多禰屯倉 來履屯倉 葉稚屯倉 河音屯倉 婀娜國膽殖屯倉 膽年部屯倉 阿波國春
日部屯倉 紀國經湍屯倉(經此云湍 俯世) 河邊屯倉 丹波國蘇斯岐屯倉(皆取音) 近
江國葦浦屯倉 尾張國間敷屯倉 入鹿屯倉 上毛野國緑野屯倉 駿河國稚贄屯倉

屯倉の設置の記事である。大和(奈良)・河内がない。備後国の10、豊国の5が多い。他に、筑紫(2)、火国(1)、播磨国(2)、阿波国(1)、紀国(2)、丹波国(1)、近江国(1)、尾張国(2)、上毛野国(1)、駿河国(1)、である。備後国と上毛野国は分かれているが、筑紫は分かれていない。

👉二年十二月 勾金橋宮で崩じた。70歳であった。

天皇崩于勾金橋宮 時年七十

👉是月 河内舊市高屋丘陵に葬った。

葬天皇于河内舊市高屋丘陵

2年に70で崩御ということから、69歳で即位したことになる。

元年に仁賢天皇の女の春日山田皇女を皇后とした。仁賢天皇11年は498年であるから、はその年以前に生まれたはずである。531年では、34歳以上となる。

安閑天皇の後妃とその皇子皇女

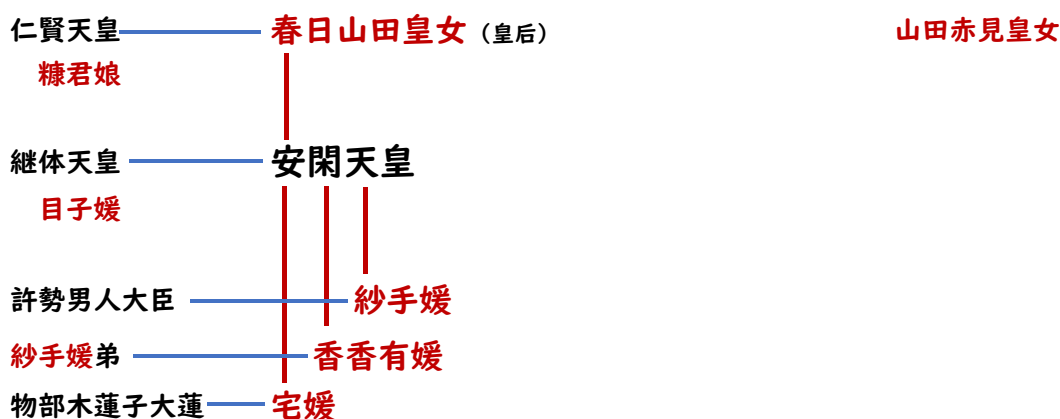


図 23.5A. 安閑天皇の後妃とその皇子皇女 (日本書紀)

古事記では無御子也とのみ書かれている。

「解説」から

安閑天皇・宣化天皇は継体天皇が天皇になる以前に、尾張連の娘との間にできた子供です。一方、欽明天皇は仁賢天皇の娘と継体天皇の間にできた子で、継体天皇自体が応神天皇の5世孫とは言え、傍流中の傍流ですから、倭の中央の氏族から見ると、欽明天皇は「本流」、安閑天皇・宣化天皇は「傍流」です。というか安閑天皇・宣化天皇は本来、天皇になれっこないような人間です。たまたま継体天皇が、後継の無くなって呼ばれただけです。

それで安閑天皇と宣化天皇の記述が少ないのではないか？と思われます。安閑天皇は記述が少ないばかりか、崩御した年齢がありません。また御陵が河内の古市の高屋の村という表現も如何なものかと。

日本神話・神社まとめ

[「安閑天皇の宮と御陵\(古事記\)」](#)

23.3. 宣化天皇紀 武小廣國押盾天皇

前文は 110 文字

☞元年春正月 桧隈廬入野に遷都した。 遷都于桧隈廬入野 因爲宮號也

☞二月 大伴金村大連を大連に、物部麿鹿火大連を大連に再任した。また、蘇我稻目宿禰を大臣に、阿倍火麻呂臣を大夫に任じた。

以大伴金村大連 爲大連 物部麿鹿火大連爲大連 並如故 又以蘇我稻目宿禰爲大臣
阿倍火麻呂臣爲大夫

大夫は新設か。

☞三月 皇后を要請するものがいた。 有司請立皇后

☞正妃としていた億計天皇の女の橘仲皇女を皇后とした。

立前正妃億計天皇女橘仲皇女爲皇后

☞二年十月 新羅が任那を寇したことから、大伴金村大連をよび、子の磐と狭手彦を任那を助けるために派遣させた。磐は筑紫に留まり国政を執り、三韓に備えた。狭手彦は任那を鎮め百済を救援した。

天皇以新羅寇於任那 詔大伴金村大連 遣其子磐與狭手彦以助任那 是時 磐留筑紫
執其國政以備三韓 狭手彦往鎮任那 加救百濟

👉四年 二月 桧隈廬入野宮で崩じた。73歳であった。

天皇崩于桧隈廬入野宮 時年七十三

👉十一月 天皇を倭国の身狭桃花鳥坂上陵に葬った。皇后の橘皇女とその孺子をこの陵に合葬した。

葬天皇于大倭國身狭桃花鳥坂上陵 以皇后橘皇女及其孺子合葬于是陵（皇后崩年傳記無載 孺子者盖未成人而葬歟）

70歳で即位したことになる。2代続いて超高齢で即位し、短命ということとは異常である。

億計天皇の崩御年は487年で、宣化天皇の即位年536年では橘仲皇女は50歳以上となる。

宣化天皇の后妃とその皇子皇女

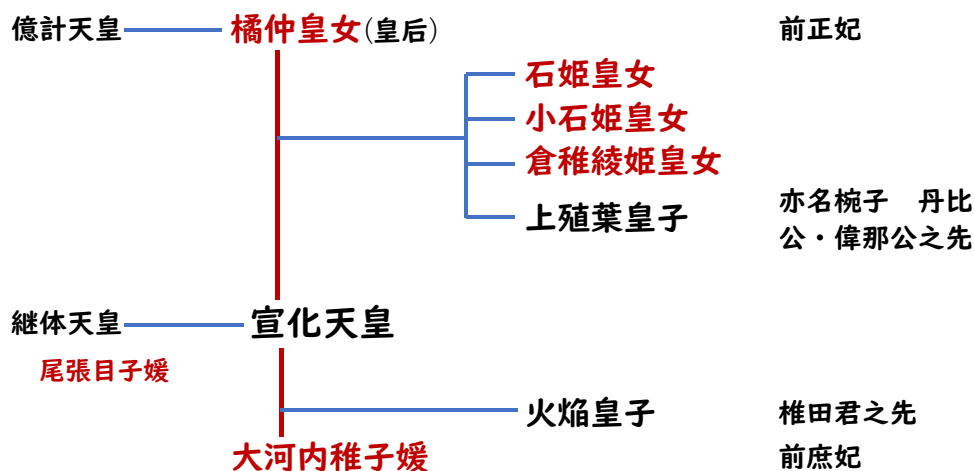


図 23.6A. 宣化天皇の后妃とその皇子皇女（日本書紀）

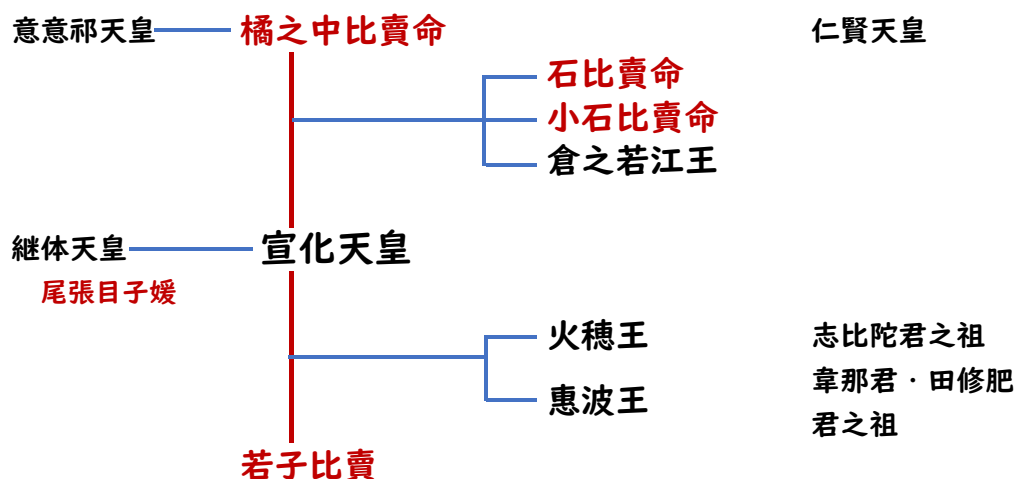


図 23.6B. 宣化天皇の后妃とその皇子皇女（古事記）

「解説」から

安閑天皇ではあった崩御の年と陵の記載が宣化天皇ではありません。5人の子息子女が書かれているので、安閑天皇よりはボリュームはありますが、安閑天皇のように子供がいなかったら、記述は異常に少なくなってしまいます。

「解説：橘仲皇女は本当に皇女か？」から

日本書紀では仁賢天皇紀に橘皇女という名前があるんですが、古事記にはそれが無い。対応するだろう名前も無い。ただし、古事記の宣化天皇記には「仁賢天皇の子の橘中比売命」という名前があるので、単に古事記の仁賢天皇記の書き損じという可能性もあるにはある（もしくは写し間違い）。

日本神話・神社まとめ

[「宣化天皇の皇后と子息子女\(古事記\)」](#)

[「宣化天皇（三）皇后と子息子女\(日本書紀\)」](#)

23.4. 欽明天皇紀 天國排開廣庭天皇

前文は 446 文字

☞宣化天皇四年十月 宣化天皇が崩じたとき、皇子の欽明天皇は群臣にいった：・・・。

武小廣國押盾天皇崩 皇子天國排開廣庭天皇令群臣曰 余幼年淺識 未閑政事 山田皇后明閑百揆 請就而決 山田皇后怖謝曰

皇子天國排開廣庭天皇 は若干おかしい気もするが、後の呼称を用いるのは、よくあることでもある。次では天國排開廣庭皇子としている。

☞十二月 欽明天皇はただちに即位した。年齢は若干である。皇后を皇太后とし、大伴金村大連・物部尾與大連を大連に、蘇我稻目宿禰大臣を大臣に再任した。

天國排開廣庭皇子 即天皇位 時年若干 尊皇后曰皇太后 大伴金村大連 物部尾與大連爲大連 及蘇我稻目宿禰大臣爲大臣 並如故

山田皇后は安閑天皇の皇后であるのでおかしい気がしたが、即位前の事であるため、称号はこれでよい。

時年若干ということは皇子の年齢がわからないということである。あるいは、知らせたくないのか。

👉元年正月 皇后を立てることを請うた者がいた。 有司請立皇后

👉宣化天皇の娘の石姫を皇后とした。

詔曰 立正妃武小廣國押盾天皇女石姫爲皇后

👉元年二月 百済人の己知部が投化した。倭国添上郡山村に置いた。今の山村己知部の先祖である。

百済人己知部投化 置倭國添上郡山村 今山村己知部之先也

👉三月 蝦夷と隼人が衆を率いて帰付した。 蝦夷 隼人 並率衆歸附

👉七月 倭国磯城郡磯城嶋に遷都した。磯城嶋金刺宮と号した。

遷都倭國磯城郡磯城嶋 仍號爲磯城嶋金刺宮

👉八月 高麗・百済・新羅・任那が使いを送り、獻じた。

高麗 百済 新羅 任那 並遣使獻 並修貢職

👉二年四月 安羅の次早岐の夷吞奚、大不孫、久取柔利、加羅の上首位の古殿奚、卒麻早岐、散半奚早岐兒、多羅の下早岐の夷他 斯二岐早岐兒 子他早岐、らと任那日本府の吉備臣は百済に往って詔書を聽かした。百済聖明王は任那の早岐らが・・・といったといった。

安羅次早岐夷吞奚 大不孫 久取柔利 加羅上首位古殿奚 卒麻早岐 散半奚早岐兒 多羅下早岐夷他 斯二岐早岐兒 子他早岐等 與任那日本 府吉備臣 (闕名字) 往赴百

かなりの人名が書かれている。安羅・多羅の早岐、加羅の首位は官名とした。多羅のところは、区切りがおかしい。表音文字として用いているのを中国語として区切ったのではないかと思われる。

👉七月 百濟は安羅日本府と新羅が通じていると聞いた。

百濟聞安羅日本府與新羅通計

👉百濟は紀臣奈率彌麻沙と中部奈率己連を派遣し下韓任那の政を上奏した。百濟遣紀臣奈率彌麻沙 中部奈率己連 來奏下韓任那之政 并上表之

下韓は下(弁)韓のことであろう。

👉四年四月 百濟の紀臣奈率彌麻沙らが帰った。 百濟紀臣奈率彌麻沙等罷之

奈率は百濟の官位で六品官。百濟の官僚に紀臣彌麻沙がいた。次の記事で、施徳は八品官、護徳は見当たらない。下の文からは、物部麻奇牟は百濟の官吏となる。

👉九月 百濟の聖明王は、前部奈率の眞牟貴文、護徳の己州己婁と物部施徳

麻奇牟らを派遣し、扶南財物と奴婢2人を献じた。

百濟聖明王 遣前部奈率眞牟貴文 護徳己州己婁 與物部施徳麻奇牟等來獻扶南財物與奴二口

👉十一月 津守連沼を百済に派遣し、任那の下韓百済郡に、城主は日本府に附するように入った。また、詔書を持たせ、・・・。

遣津守連 沼百済曰 在任那之下韓 百済郡令 城主 宜附日本府 并持詔書 宣曰 爾屢抗表 稱當建任那十餘年矣 表奏如此 尚未成之 且夫任那者爲爾國之棟梁 如折棟梁 誰成屋宇 朕念在茲 爾須早建 汝若早建任那

👉十二月 百済の聖明王は、前の詔書を群臣に示し、天皇はこのようにしているが、どのように・・・。

百濟聖明王 復以前詔普示群臣曰 天皇詔勅如是 當復何如・・・

👉この月、施徳の高分を派遣し、任那執事と日本府執事を召した。・・・

是月乃遣施徳高分 召任那執事與日本府執事 俱答言 過正旦而往聽焉

👉五年正月 百済国は使いを送り任那執事と日本府執事を召した。・・・

百濟國遣使召任那執事與日本府執事 俱答言 祭神時到 祭了而往

俱答言までは前記事とほぼ同じである。ここでは、任那と日本府は異なるもので、共に執事がいたことでもかなりの収穫と考えている。俱答言 以下は、両者とも理解できていない。

聖明王はいない。聖王の在位は523年から554年。

👉この記事も同様に理解できていない。

是月 百濟復遣使召任那執事與日本府執事 日本府 任那 俱不遣執事 而遣微者 由是百濟不得俱謀建任那國

👉二月 百濟は、施徳の馬武・施徳の高分屋・施徳の斯那奴次酒らを、任那に派遣し謂った：・・・。

百濟遣施徳馬武 施徳高分屋 施徳斯那奴次酒等 使于任那 謂・・・

👉三月 百濟は、奈率の阿口得文許勢・奈率の哥麻物部・奈率の哥非らを派遣し、次のように上表した：・・・。

百濟遣奈率阿口得文 許勢奈率哥麻 物部奈率哥非等 上表曰・・・

👉十月 百濟の使いの奈率得文と奈率哥麻らは帰った。（百濟本記では・・・

百濟使人奈率得文 奈率哥麻等罷歸（百濟本記云 冬十月奈率得文 奈率哥麻等還自日本曰 所奏河内直移那斯 麻都等事 無報勅也）

👉十一月 百濟は使いを送り、日本府臣と任那執事を召していった：天皇に派遣した奈率の得文・許勢奈率哥麻・物部奈率哥非らが日本より還った。・・・。

百濟遣使召日本府臣 任那執事曰 遣朝天皇 奈率得文 許勢奈率哥麻 物部奈率哥非等還自日本・・・

👉六年三月 膳臣巴提便を百濟に派遣した。 遣膳臣巴提便使于百濟

👉五月 百濟は奈率の其俊・奈率の用哥多・施徳の次酒らを送り、上表した。

百濟遣奈率其俊 奈率用哥多 施徳次酒等上表

👉九月 百濟は中部護徳の菩提らを任那に使いとして派遣し、呉財を日本府臣と諸早岐に贈った。

百濟遣中部護徳菩提等使于任那 贈呉財於日本府臣及諸早岐各有差

👉是月 この月、百濟は丈六の佛像を造った。 百濟造丈六佛像

👉十一月 膳臣巴提便が百濟から還っていった。 膳臣巴提便還自百濟言

👉是歳 この年、高麗に大乱がおき、民衆が誅殺された。(百濟本記では・・・) 高麗大亂被誅殺者衆 (百濟本記云・・・)

高句麗本記などで確かめられるか。545年

👉七年正月 百濟の使いの中部奈率己連らが帰った。良馬七十匹と船十隻を贈った。 百濟使人中部奈率己連等罷歸 仍賜以良馬七十匹 船一十隻

👉六月 百濟は中部奈率の掠葉禮らを派遣し、獻調した。

百濟遣中部奈率掠葉禮等獻調

👉八年四月 百濟は前部徳率の眞慕宣文と奈率の哥麻らを派遣し救援を乞い、・・・。

百濟遣前部徳率眞慕宣文 奈率哥麻等 乞救軍 仍貢下部東城子言代徳率口休麻那

👉九年正月 百濟の使いの前部徳率の眞慕宣文らが帰ることを請うた。要請の救援軍は必ず派遣すると王に速やかに報告するといった。

百濟使人前部德率眞慕宣文等請罷 因詔曰 所乞救軍必當遣救 宜速報王

👉四月 百濟は中部枉率の掠葉禮らを派遣し奏上した： 徳率の宣文らにおおせられた所の救援兵……。馬津城之役(正月に、高麗が衆を率いて馬津城を囲んだ)捕虜がいった： 安羅国と日本府……。 (理解不足)

百濟遣中部枉率掠葉禮等奏曰 徳率宣文等奉勅至臣蕃曰 所乞救兵應時遣送 祇承恩詔 喜慶無限 然馬津城之役 (正月 高麗卒衆圍馬津城) 虜謂之曰 由安羅國與日本府招來勸罰 以事准況……

👉六月 百濟に使者を派遣し謂った： 徳率の宣文が帰った後の状況はどうなったのか。汝の国は貊賊の被害にあったと聞く。任那とともに謀り、これを防ぐことがよい。

遣使詔于百濟曰 徳率宣文取歸以後 當復何如 消憇何如 朕聞 汝國爲貊賊所害 宜共任那策勵 同謀如前防距

👉閏七月 百濟の使いの掠葉禮らが帰った。 百濟使人掠葉禮等罷歸

👉十月 得爾辛に築城を助けるため、370 人を派遣した。

遣三百七十人於百濟助築城於得爾辛

👉十年六月 將軍の徳久貴固と徳馬次文が帰ることを望んだ。これにたいし、いった： ……。

將徳久貴 固徳馬次文等請罷歸 因詔曰 延那斯 麻都 陰私遣使高麗者 朕當遣問虛實 所乞軍者依願停之

👉十一年二月 百濟に使者を派遣し謂った： ……。 (百濟本記では、日本

の使者の阿比多が多を率いて都についた。)

遣使詔于百濟 (百濟本記云 三月十二日 日本使人阿比多率三舟來至都) 曰

👉四月 百濟にいた日本王人方が還ることを望んだ。(百濟本記では、日本の阿比多が多が還った。) 百濟王の聖明はいった： . . .

在百濟日本王人方欲還之 (百濟本記云 四月一日 日本阿比多還也) 百濟王聖明謂王人曰 任那之事奉勅堅守 延那斯 麻都之事 問與不問唯從勅之 因獻高麗奴六口別贈王人奴一口 (皆攻爾林所禽奴也)

👉百濟は中部奈率の皮久斤と下部施徳の灼干那を派遣し、狛の捕虜 10 人を貢いだ。 百濟遣中部奈率皮久斤 下部施徳灼干那等 獻狛虜十口

👉十二年 麦種一千斛(10,000 斗、100 石)を百濟王に賜った。

以麥種一千斛賜百濟王

👉この年、百濟の聖明王は 2 国の兵(新羅と任那)と衆を率いて高麗を伐親征を行い、漠城の地を獲った。また、平壤に軍を進めた。6 郡を得、領地を取り戻した。

是歲 百濟聖明王親率衆及二國兵 (二國謂新羅 任那也) 往伐高麗 獲漠城之地 又進軍討平壤 凡六郡之地 遂復故地

この時は、百濟は新羅より上であった。551 年

👉十三年五月 百濟・加羅・安羅は中部徳率の木州今敦と河内部阿斯比多ら

を派遣して奏上した：高麗と新羅は通じて勢いを増し、謀って臣国と任那を滅ぼそうとしている。故に、救援を要請する。

百濟 加羅 安羅 遣中部徳率木州今敦 河内部阿斯比多等 奏曰 高麗與新羅 通和并勢 謀滅臣國與任那 故謹求請救兵 . . .

👉十月 百濟の聖明王は(聖王ともいう) 西部姫氏達率の怒口斯致契らを派遣し、金銅釈迦仏一軀、幡盖若干、經論若干卷を献じた。

百濟聖明王(更名聖王) 遣西部姫氏達率怒口斯致契等 獻釋迦佛金銅像一軀 幡盖若干・經論若干卷 . . .

👉この年、百濟は漢城と平壤を放棄した。これにより、新羅は漢城に入居した。今新羅の、牛頭方と尼彌方である。

是歳 百濟棄漢城與平壤 新羅因此入居漢城 今新羅之牛頭方 尼彌方也(地名未詳)

百濟の放棄した漢城に新羅が何故、高句麗は？

👉十四年正月 百濟は上部徳率の科野次酒と杆率の禮塞敦らを派遣し、軍兵を乞うた。 百濟遣上部徳率科野次酒 杆率禮塞敦等 乞軍兵

👉百濟使人の中部徳率木口今敦と河内部阿斯比多らが帰った。

百濟使人中部徳率木口今敦 河内部阿斯比多等罷歸

👉河内国はいった：泉郡茅渟海で梵音がし、震響もしくは雷聲があった。天皇は心異なり、溝邊直を派遣し、これを求めた。

河内國言 泉郡茅渟海中有梵音 震響若雷聲 光彩晃曜如日色 天皇心異之 遣溝邊直(此但曰直不書名字 蓋是傳寫誤失矣) 入海求訪

👉この月、溝邊直は海に入り、樟木が浮かび玲瓏をだしているのを見た、これを献じた。天皇は畫工に命じ、仏像を2体造らせた。今、吉野寺の放光樟像である。

是月 溝邊直入海果見樟木浮海玲瓏 遂取而獻 天皇命畫工造佛像二軀 今吉野寺放光樟像也

Wikipedia「世尊寺（奈良県大淀町）」

世尊寺は、奈良県吉野郡大淀町比曾にある曹洞宗の寺院。聖徳太子靈跡第7番。古くは吉野寺と呼ばれ、聖徳太子が建立した48か寺の一つと伝えられている。同寺に残っている瓦や東塔・西塔の三重塔を要する薬師寺式伽藍配置などから、少なくとも飛鳥時代(7世紀後半)には存在していたようである。奈良時代には、吉野寺比曾(比蘇)山寺と呼ばれ、後述する現光寺の寺名の由来となった仏像が安置された。渡来僧の道璿は晩年比蘇山寺に入り、修禪に精励したと伝わる。また著名な僧侶・神叡が住み、20年間三蔵を学んで自然智を得たという。

👉六月 内臣を百済に派遣し、・・・を賜った。・・・隨王・・・。

遣内臣(闕名) 使於百濟 仍賜良馬二疋 同船二隻 弓五十張 箭五十具 勅云 所請軍者 隨王所須 別勅醫博士 易博士 曆博士等 宜依番上下 今上件色人正當相代年月

宜付還使相代 又卜書 曆本種種藥物可付送

隨王については、理解できていない。

👉七月 樟勾宮に幸した。蘇我大臣稻目宿禰は、勅を奉じて、王辰爾を……。ただちに、王辰爾を船長とし、船史の姓を与えた。今の般連の祖先である。

幸樟勾宮 蘇我大臣稻目宿禰奉勅遣王辰爾數録船賦 即以王辰爾爲船長 因賜姓爲船史 今般連之先也

👉八月 百濟は上部奈率科野新羅と下部固徳の□休帶山らを派遣し、上奏した。百濟遣上部奈率科野新羅 下部固徳□ 休帶山等上表曰 ……

👉十月 百濟王子の餘昌(明王子、威徳王である)は国中の兵をことごとく集め、高麗国に立ち向かった。

百濟王子餘昌(明王子 威徳王也) 悉發國中兵 向高麗國

威徳王(餘昌)の在位は 554 年から 598 年。

👉十五年正月 百濟は中部木州施徳の文次と前部施徳の佐分屋を筑紫に派遣した。百濟遣中部木州施徳文次 前部施徳曰佐分屋等於筑紫

👉二月 百濟は下部杆率將軍の三貴と上部奈率の物部烏を派遣し援兵を乞うた。百濟遣下部杆率將軍三貴 上部奈率物部烏等乞救兵

👉三月 百濟使人の中部木州施徳の文次らが帰った。

👉五月 内臣は舟師を率いて百濟に詣でた。 内臣率舟師詣于百濟

👉十二月 百濟は下部杆率の□斯干奴を派遣し奏上した： 百濟王の臣明と安羅諸倭臣ら、任那諸国早岐らは申し上げる。斯羅は無道で、天皇を敬わず猪とて海北を滅ぼし、移ろうとしている。臣らは兵をおくり斯羅を征伐することを乞う。

百濟遣下部杆率□斯干奴上表曰 百濟王臣明及在安羅諸倭臣等 任那諸國早岐等奏以斯羅無道 不畏天皇與猪同心欲殘滅海北彌移居 臣等共 議遣有至臣等仰乞軍士 征伐斯羅

👉十六年二月 百濟王子の餘昌は王子惠(王子惠は威徳王之弟である)を派遣し、奏上した。 百濟王子餘昌遣王子惠 (王子惠者 威徳王之弟也) 奏曰

杆率は五品官。斯羅は新羅と同じか異なるのか。

威徳王は第 27 代の王で、在位期間は 554 年から 598 年。第 28 代は恵王。

👉七月 蘇我大臣稻目宿禰 穗積磐弓臣らを派遣し、吉備五郡に白猪屯倉を置いた。 遣蘇我大臣稻目宿禰 穗積磐弓臣等 使于吉備五郡置白猪屯倉

大臣を派遣するほどの事が吉備で起きたのか。吉備五郡に白猪屯倉を置

くこと自体がそれに相当するのか。十七年七月でも。後者では備前と書かれている。吉備の分割が行われたのか。

👉八月 百濟餘昌は諸臣らが・・・と述べたといった。百濟餘昌謂諸臣等曰・・・

👉十七年正月 百濟王子の恵は還ることを請うた。 百濟王子恵請罷

👉七月 蘇我大臣稻目宿禰らを派遣し、備前兒嶋郡に屯倉を置いた。葛城山田直瑞子を田令とした。(田令は陀豆歌毘という)

遣蘇我大臣稻目宿禰等於備前兒嶋郡置屯倉 以葛城山田直瑞子爲田令 (田令 此云陀豆歌毘)

👉十月 蘇我大臣稻目宿禰らを派遣し、倭国高市郡に韓人大身狹屯倉 (韓人は百濟である)、高麗人小身狹屯倉、紀国に海部屯倉を置いた。

遣蘇我大臣稻目宿禰等 於倭國高市郡置韓人大身狹屯倉(言韓人者 百濟也) 高麗人小身狹屯倉 紀國置海部屯倉 (一本云・・・)

👉十八年三月 百濟王子の餘昌が跡をついだ。威徳王である。

百濟王子餘昌嗣立 是爲威徳王

👉廿一年九月 新羅は彌至己知奈末を派遣し、調賦を献じた。

新羅遣彌至己知奈末獻調賦

👉廿二年 新羅は久禮叱及伐干を派遣し、調賦を貢いだ。

新羅遣久禮叱及伐干貢調賦

👉この年、また奴口大舎を派遣し調賦を献じた。難波大郡で諸蕃を序す(?)。

掌客の額田部連と葛城直らは百済の下に並べ引導した、大舎は怒って還り館舎に入らず、抜根に乗って還り、穴門についた。ここにおいて穴門館を改修した。大舎はどの客の為造るのかと聞いた。工匠の河内馬飼首押勝は、西から来た無礼な使者の宿泊所と答えた。大舎は国に還り、そのことを報告した。それゆえ、新羅は阿羅波斯山に城を築き、日本に備えた。

是歲 復遣奴口 大舎獻前調賦 於難波大郡序諸蕃 掌客額田部連 葛城直等使列于百濟之下而引導 大舎怒還不入館舎 乘船歸至穴門 於是 脩治穴門 館 大舎問曰 爲誰客造 工匠河内馬飼首押勝欺給曰 遣問西方無禮使者之所停宿處也 大舎還國告其所言 故新羅築城於阿羅波斯山 以備日本

難波大郡は、この後、推古天皇 16 年、舒明天皇 2 年にも現れる。

👉廿三年正月 新羅は任那官家を打ち滅ぼした。(廿一年ともいう。任那は任那あるいは加羅国ともいう、安羅國、斯二岐國、多羅國、卒麻國、古嗟國、子他國、散半下國、乞口國、稔禮國の合わせて 10 か国である。)

新羅打滅任那官家 (一本云 廿一年任那滅焉 忽言任那 別言加羅國 安羅國 斯二岐國 多羅國 卒麻國 古嗟國 子他國 散半下國 乞口國 稔禮國 合十國)

これに関する記事が続く。使者が帰らず留まった記事が 2 つ。

今河内国更荒郡□□野邑新羅人の先祖

今摂津国三嶋郡埴廬新羅人の先祖

廿六年五月 高麗人の頭霧口耶陞らが筑紫で投化した。山背国においた。
今の畝原・奈羅山村の高麗人の先祖である。

高麗人頭霧口耶陞等投化於筑紫 置山背國 今畝原 奈羅 山村高麗人之先祖也

卅一年三月 蘇我大臣稻目宿禰が薨じた。 蘇我大臣稻目宿禰薨

四月 越人江渟臣裾代は京に詣で奏上した： 高麗の使者が波風にさらされ、漂着した。郡司はこれを隠したため臣は顯奏した。

越人江渟臣裾代詣京奏曰 高麗使人辛苦風浪迷失浦津 任水漂流 忽到着岸 郡司隱匿 故臣顯奏

この月、東漢氏直糠兒と葛城直を難波に派遣し、高麗使人を迎え召寄せた。
是月 遣東漢氏直糠兒 葛城直難波迎召高麗使人

五月 膳臣傾子を越に派遣し高麗使をもてなした。遣膳臣傾子於越饗高麗使

七月 高麗使は近江に到着した。 高麗使到于近江

この月、許勢臣猿と吉士赤鳩を派遣した。難波津より出発した。引き船を狹狹波山に留め、裝飾船で近江北山に往って迎えた。・・・。

是月 遣許勢臣猿與吉士赤鳩發自難波津 控引船於狹狹波山 而裝飾船乃往迎於近江北山 遂引入山背高威館 則遣東漢坂上直子麻呂 錦部首大石以爲守護 更饗高麗使者於相樂館

卅二年三月 坂田耳子郎君を新羅に派遣し、任那を滅ぼした理由を問う

た。

遣坂田耳子郎君 使於新羅 問任那滅由

👉この月、高麗はものを献じ、・・・

是月 高麗獻物并表未得呈奏 經歷數旬 占待良日

👉四月 内寝で崩じた。年齢は若干である。

天皇遂崩于内寝 時年若干

安閑・宣下は高齢・短期であったことから、

安閑天皇→欽明天皇 と他に、たとえば、継体天皇→宣下天皇、あるいは、継体天皇→用明天皇 の抗争が考えられるか。

和風諡号に天がつく天皇は少ない。

天照大神、天之忍穗耳命、

欽明天皇(天国排開広庭尊)、

天智天皇(天命開別尊)、天武天皇(天淳中原瀛真人尊)

新唐書に 欽明之十一年 直梁承聖元年 と書かれている。梁の世祖元帝の年号で、承聖元年は552年である。これからは、欽明元年は542年、欽明32年は573年となる。新羅の王は真興王540-576である。

これより、作業仮説 23.1 を得た。

百濟本記聖王 523-554 紀に 王遣將軍達已 領兵一萬 攻取高句麗道薩城 三月
高句麗兵圍金峴城 という記事がある。聖王二十八年は 550 年である。
十二年の記事と対応するか。

欽明天皇の后妃とその皇子皇女

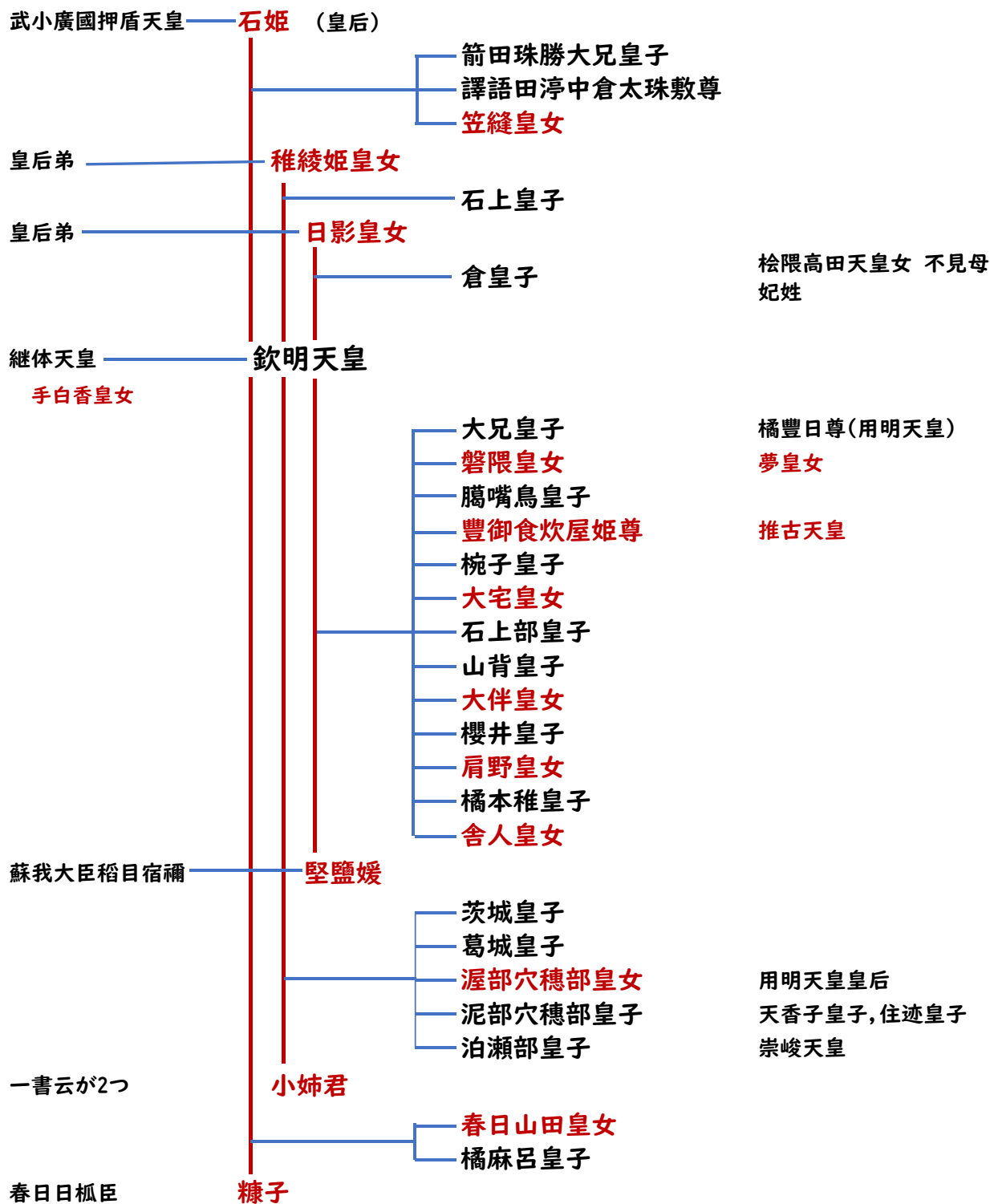


図 23.7A. 欽明天皇の后妃とその皇子皇女 (日本書紀)

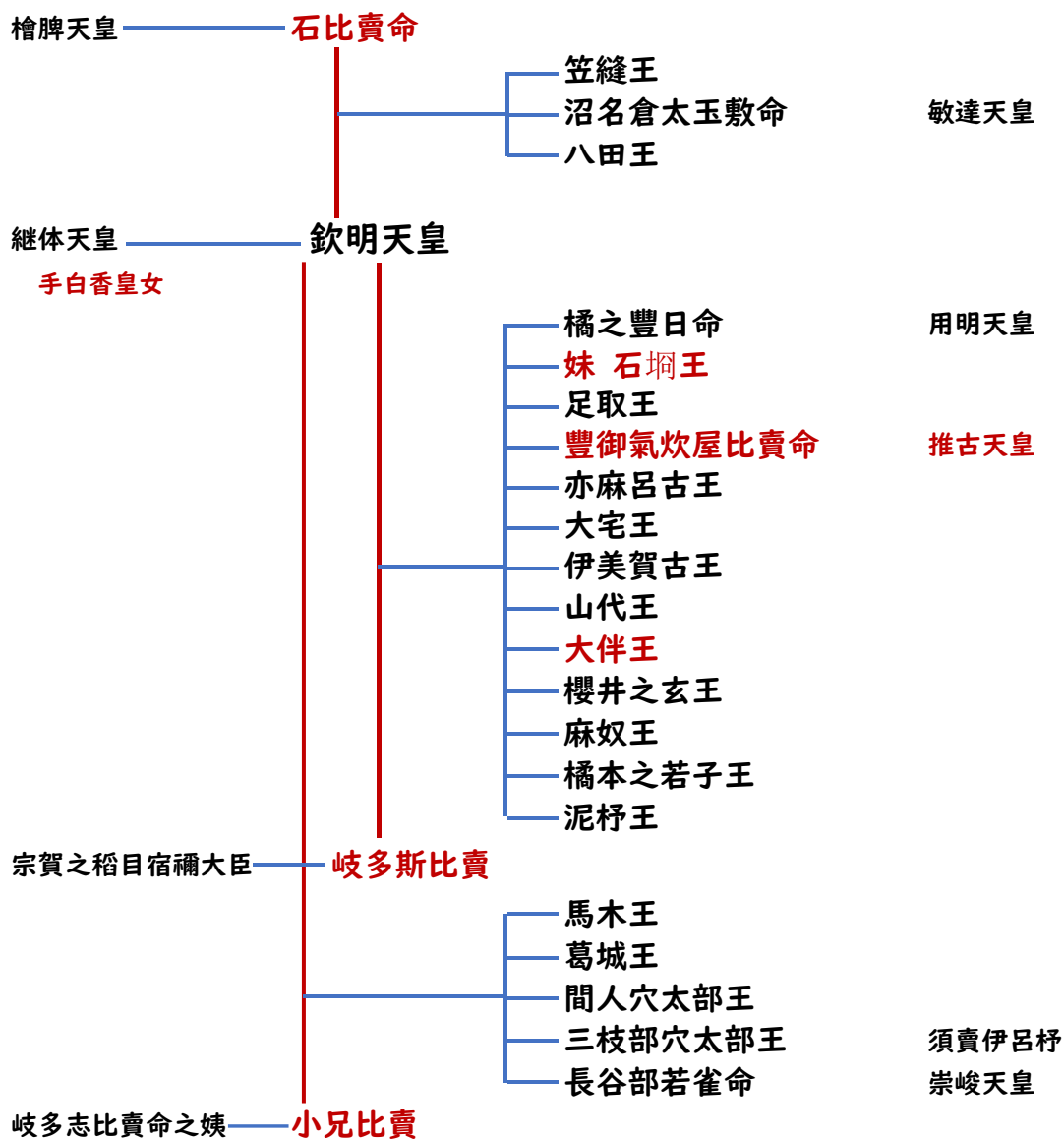


図 23.7B. 欽明天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

日本書紀では堅鹽媛の生んだ子が 13 人、古事記でも岐多斯比賣の生んだ子が 13 人となっている。また、石姫は石比賣命に、小姉君は小兄比賣にたいおうし、生んだ子の人数も同じである。日本書紀は古事記の後妃に稚綾姫皇女と子の石上皇子・日影皇女と子の倉皇子、および、糠子の 3 人の妃と 2 人の皇子を加えたことになっている。

「[日本神話・神社まとめ](#)」では、以後の天皇に対して、系図は作成されていない。今後作成されるのではないかと期待している。「解説」幾つかを引用する。

「解説：皇女と天皇」から

欽明天皇が天皇になる、その前に欽明天皇は春日山田皇女に「政治を行うよう」に求めます。当然というべきか、断られ、欽明天皇が天皇につくのですが…。女性が政治を行うことは、この時代においてはそれほど特殊なことという感覚が無かったのではないかと思います。実際、清寧天皇と顯宗天皇の間には飯豊皇女という、名もなき天皇があり、古くでは神功皇后というスーパーヒロインがいます。また、天皇の皇后がほとんど皇女であることを考えると、皇后や妃は単なる后妃ではなく、ちゃんとした政治的な役割があったと考えたほうが自然じゃないかと思います。

「解説：石姫」から

石姫の父親は宣化天皇、母親は橘仲皇女。橘仲皇女は仁賢天皇の娘です。変な話ですが、継体天皇以降、天皇の血を受け継いでいるのは、どちらかというとも皇女なんですよね。

「解説」から

皇后となった石姫皇女の妹たちの綾姫皇女・日影皇女の姉妹なのですが、日本書紀の宣化天皇のところに日影皇女という文字が無く、それに関しても日本書紀の編者が、どこの書からの引用か分からないが、今後明らかになるだろう、と書いてあるわけです。普通に考えると日影皇女＝小石姫皇女なのですが、宣化天皇に別に記述されていない妃がいて記述されなかった異母姉妹が日影皇女なのかもしれません。

蘇我氏の娘の堅塩媛が妃となり、後の用明天皇と推古天皇を生みます。推古天皇は最初の女性天皇とされます(神功皇后と飯豊皇女は除く)。ここから蘇我氏が強権を握っていきます。

日本神話・神社まとめ

[「欽明天皇（五）皇后と子息子女\(日本書紀\)」](#)

[「欽明天皇（三）山田皇后に政事を・皇子の徳\(日本書紀\)」](#)

[「欽明天皇（九）后妃と子息子女\(日本書紀\)」](#)

[「欽明天皇（十）堅塩媛の13人の子\(日本書紀\)」](#)

23.5. 敏達天皇紀 淳中倉太珠敷天皇

前文は 83 文字。前文は短い。

☞元年四月 百濟大井を宮とし、物部弓削守屋大連を再度大連とし、蘇我馬子宿禰を大臣とした。

宮于百濟大井 以物部弓削守屋大連爲大連 如故 以蘇我馬子宿禰爲大臣

☞五月 皇子と大臣に高麗使人は今何処にいるのかと問うた。大臣は大臣宅にいると答えた。

天皇問皇子與大臣曰 高麗使人今何在 大臣奉對曰 在於大臣

☞天皇は高麗の上奏文を大臣に渡した。諸史を集めこれを読解することを命じた。諸史は3日でみな読むことができなかった。船史の先祖王辰爾のみが読むことが出来た。

天皇執高麗表疏授於大臣 召聚諸史令讀解之 是時諸史於三日內皆不能讀 爰有船史祖王辰爾

高麗の上奏文は中国語(漢文)で書かれていたと考える。この記事が書かれていることから、これまでの大臣は読解できたと考える。

これまで、百濟などの使者と話している。このとき、会話はどうしたのか。

欽明卅一年に來た高麗使か。

👉六月 高麗大使は副使らが・・・といったといった。高麗大使謂副使等曰・・・

👉七月 高麗使人が歸った。 高麗使人罷歸

👉二年五月 高麗の使者が越の海岸に泊った。船は破れ溺死者が多数いた。朝廷は疑い迷い、もてなさずに還した。なお、吉備海部直難波に命じて、使者を送らせた。

高麗使人泊于越海之岸 破船溺死者衆 朝廷猜疑迷路 不饗放還 仍勅吉備海部直難波送高麗使

👉七月 (理解できていない)

於越海岸 難波與高麗使等相議 以送使難波船人大嶋首磐曰 狹丘首間狹 令乘高麗使船 以高麗二人令乘送使船 如此互乘以備奸志 俱時發船至數里許 逆使難波乃恐畏波浪 執高麗二人擲入於海

👉八月 (理解できていない)

送使難波還來 復命曰 海裏鯨魚大有遮嚙船與楫櫂 難波等恐魚吞船不得入海 天皇聞之 識其謾語駭使於官不放還國

👉三年五月 高麗使人が越海の岸に漂白した。 高麗使人泊于越海之岸

👉七月 高麗使人は入京し、奏上した。 高麗使人入京奏曰

👉十月 (内容がわからない) 蘇我馬子大臣を吉備國增益白猪屯倉と田部に派遣し、田部の名籍を白猪史膽津に授けた。

遣蘇我馬子大臣於吉備國增益白猪屯倉與田部 即以田部名籍授于白猪史膽津

船史王辰爾の弟の牛に津史の姓を与えた。 船史王辰爾弟牛賜姓爲津史

十一月 新羅遣使進調

新羅は使を派遣し、進調した。

四年二月 馬子宿禰大臣は京師に戻り、屯倉のことを復命した。

馬子宿禰大臣還于京師 復命屯倉之事

百済は使いを遣り常より多くの進調をした。新羅が任那再建しないことから、皇子と大臣に任那のことを忘れるなかれといった。

百済遣使進調 多益恒歳 天皇以新羅未建任那 詔皇子與大臣曰 莫懶懈於任那之事

四月 吉士金子を新羅に派遣し、吉士木蓮子を任那に派遣し、吉士譯語彦を百済に派遣した。

遣吉士金子使於新羅 吉士木蓮子使於任那 吉士譯語彦使於百済

六月 新羅が遣使し、常例より多くを進調した。また、多多羅、須奈羅、和陀、發鬼の四邑の進調もした。

新羅遣使進調多 益常例 并進多多羅 須奈羅 和陀 發鬼四邑之調

この年、卜者に海部王家地と絲井王家地占うように命じた。占いは吉であった。譯語田に宮を営んだ、これが幸玉宮である。

是歳 命卜者占海部王家地與絲井王家地 卜便襲吉 遂營宮於譯語田是謂幸玉宮

六年 二月 日記部と私部を置いた。 詔 置日記部 私部

六年五月 遣大別王と小黒吉士を百済国に宰として派遣した。(宰の由来、使いのことである)

大別王與小黑吉士 宰於百濟國（王人奉命爲使三韓 自稱爲宰 言宰於韓 盖古之典乎 如今言使也 餘皆倣此 大別王未詳所出也）

👉十一月 百濟国王は大別王らが還るのに託して、經論若干卷・律師・禪師・比丘尼・咒禁師・造佛工・造寺工六人を献じた。

百濟國王付還使大別王等 獻經論若干卷并律師 禪師 比丘尼 咒禁師 造佛工 造寺工六人 遂安置於難波大別王寺

難波大別王寺とは？

👉七年春三月 菟道皇女を伊勢祠侍らせた。池邊皇子が奸した。

以菟道皇女侍伊勢祠 即奸池邊皇子 事顯而解

👉八年十月 新羅は枳叱政奈末を派遣し、進調した。また佛像を送った。

新羅遣枳叱政奈末進調 并送佛像

👉九年六月 新羅は枳叱政奈末を派遣し、進調した。これを押さまなかつたので還った。

新羅遣安刀奈末 失消奈末進調 不納以還之

👉十年二月 数千の蝦夷が辺境を冠した。

蝦夷數千寇於邊境

👉十二年七月 先の天皇の世に、新羅は内官家の国を滅ぼした。（欽明天皇廿三年 任那爲新羅所滅である）・・・今百済に居る火葦北國造阿利斯登子と達率日羅賢は勇氣あるものである。それゆえ、かれらと相計り、紀國造押勝と吉備海部直羽嶋を百済に派遣したい。

詔曰 屬我先考天皇之世 新羅滅内官家之國（天國排開廣庭天皇廿三年任那爲新羅所滅 故云新羅滅我内官家也）先考天皇謀復 任那 不果而崩 不成其志 是以朕當奉助神謀復興任那 今在百濟火葦北國造阿利斯登子 達率日羅賢而有勇 故朕欲與其人相計 乃遣紀國造押勝與吉備海部直 羽嶋喚於百濟

日羅は白杵関連の民話で現れる。

👉十月 紀国造押勝らが百濟から還った。復命し言った：百濟の国主は日本をいとおしみ、日羅は不肯聽である。

紀國造押勝等還自百濟 復命於朝曰 百濟國主奉惜日羅不肯聽上

👉是歲 この年、ふたたび吉備海部直羽嶋を派遣し、百濟で日羅をよんだ。・・・ 復遣吉備海部直羽嶋召日羅於百濟 羽嶋既之百濟 欲先私見日羅・・・

👉十三年二月 難波吉士木蓮の子を新羅に派遣した。任那にいった。

遣難波吉士木蓮子使於新羅 遂之任那

👉九月 鹿深臣は百濟より彌勒石像一体をもってきた。佐伯連も仏像一体。

從百濟來鹿深臣(闕名字) 有彌勒石像一軀 佐伯連(闕名字) 有佛像一軀

👉この年、蘇我馬子宿禰は請うた。鞍部村主司馬達らと池邊直氷田を四方に派遣し修行者をもとめた。ここで、播磨國の得僧還俗者の高麗惠便大臣を師とした。司馬達等の女の嶋と曰善信尼(年十一歳)を得度した。また、善信尼弟子二人を得度した。一人は漢人夜菩の女の豊女、もう一人は錦織

壺の女の石女 で名を惠善尼(壺は都苻)とした。馬子は・・・

是歲 蘇我馬子宿禰請其佛像二軀 乃遣鞍部村主司馬達等 池邊直氷田 使於四方
訪覓修行者 於是唯於播磨國得僧還俗者 名高麗惠便 大臣乃以爲師 令度司馬達等女
嶋 曰善信尼(年十一歲) 又度善信尼弟子二人 其一漢人夜菩之女豐女 名曰禪藏尼
其二錦織壺之女石女 名曰惠善尼(壺 此云都 苻) 馬子獨依佛法・・・

👉十四年 二月 蘇我大臣馬子宿禰は大野丘北で塔を起こした。

蘇我大臣馬子宿禰起塔於大野丘北大會設齋 即以達等前所獲舍利藏塔柱頭

👉八月 病が悪化し、大殿で崩じた。殯宮を廣瀬で起こした。

天皇病彌留崩于大殿 是時起殯宮於廣瀬

殯宮は始めてか。

敏達天皇の后妃とその皇子皇女

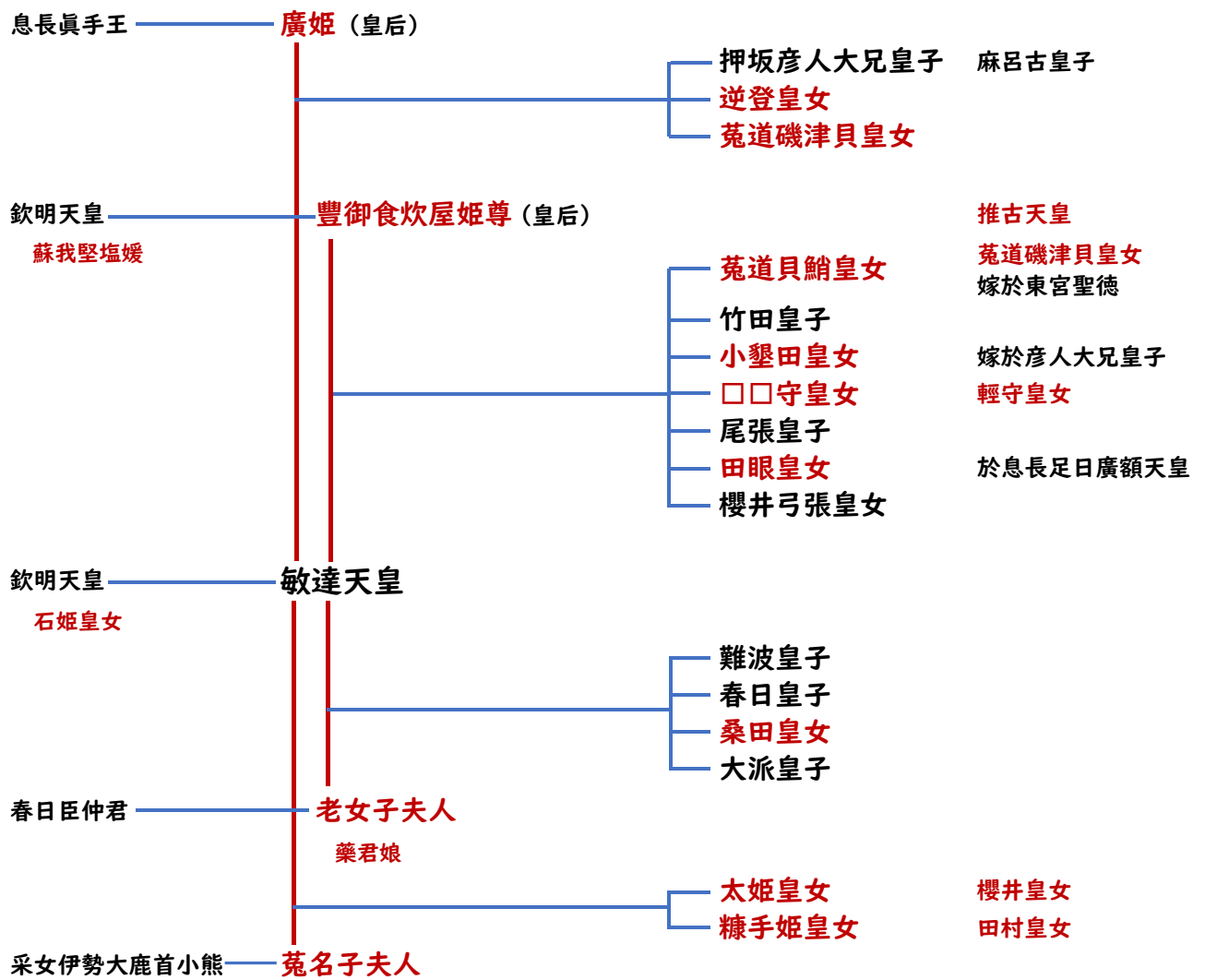
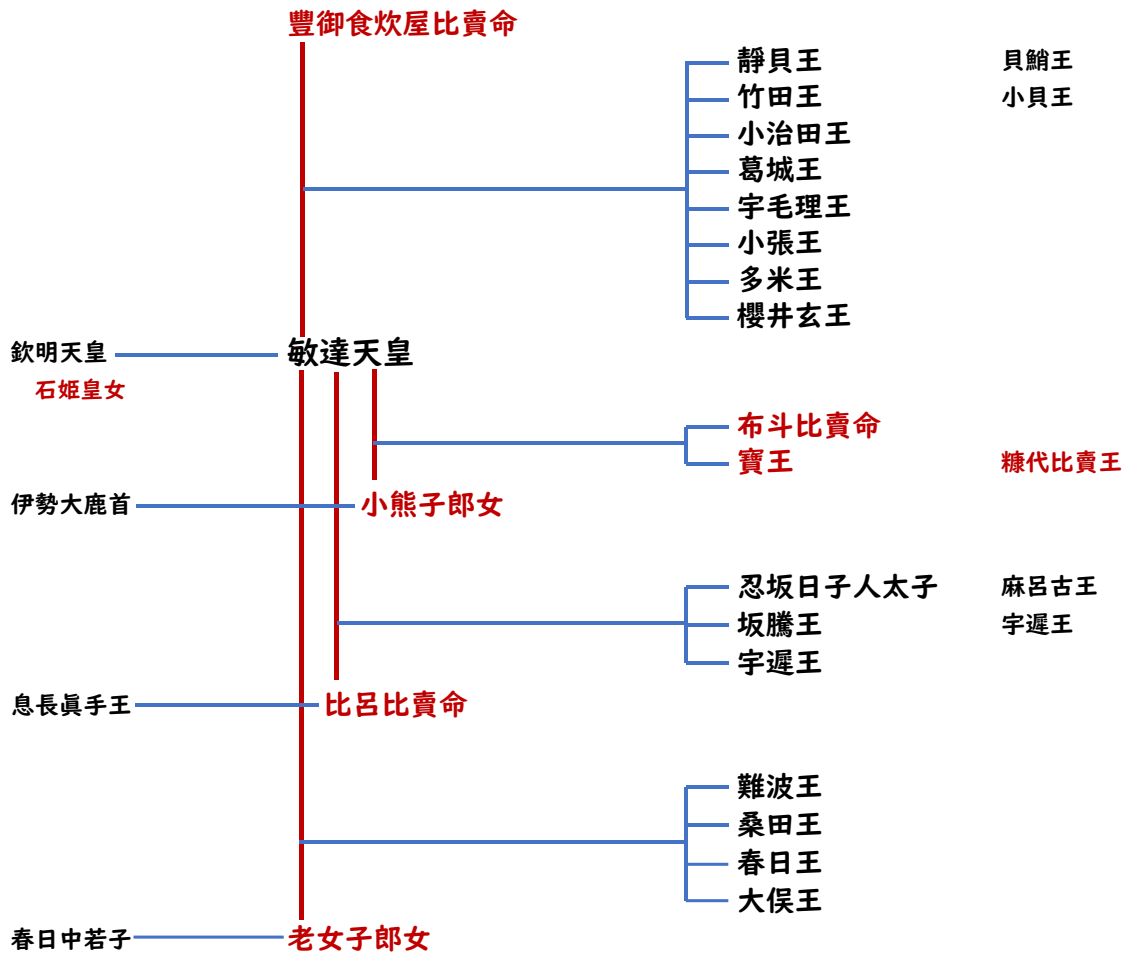


図 23.8A. 敏達天皇の后妃とその皇子皇女 (日本書紀)



日子人太子 娶庶妹田村王 (亦名糠代比賣命) 生御子 坐岡本宮治天下之天皇 次中津王 次多良王 (三柱) 又娶漢王之妹 大俣王 生御子 智奴王 次妹桑田王 (二柱) 又娶庶妹玄王 生御子 山代王 次笠縫王

図 23.8B. 敏達天皇の後妃とその皇子皇女 (古事記)

「解説：宝王」から

別名を糠代比賣命ということは、日子人太子(舒明天皇の父)に嫁いだ田村王と同一人物になるけど、本当か？

「解説：漢王」から

敏達天皇の妃の一人、老女子郎女の子供である大股王の兄であるということは、漢

王も老女子郎女の子供ということになる。つまり、老女子郎女の前夫の子。まあ、大股王というのが割とスタンダードでよくある名前で、全く関係ないということもあるかもしれない。

「解説：前半と後半はちょっと意味が違う」から

前半は純粹に敏達天皇の皇后・妃と子息子女のことですが、途中から日子人太子の子孫の話になります。日子人太子は皇位を継ぐ予定の皇太子でありながら、結局、皇位につくことが無かった太子です。この日子人太子の子供が天武天皇の父の舒明天皇になります。古事記がそもそも天武天皇の命令によって作られたものですから、天武天皇の父の舒明天皇を特別に描くのは当然のことです。

「解説」から

息長真手王は継体天皇の妃の父としてすでに名前が出てきています。しかし継体天皇(生年 450-531)と敏達天(生年 538-585)でちょっと年代が離れているのですよね。ただ、ありえない、というほどの離れ方でもない。息長真手王が10代で作った娘を継体天皇に嫁がせて、72代に子供を作って、敏達天皇に嫁がせるということも不可能じゃない。だから、何かの混乱か、意図的な操作があったか、それとも史実かというのはなんとも言えない。

「解説：池辺皇子」から

敏達天皇の娘の菟道皇女を犯した人物である池辺皇子。ここ以外ではこの名前では出てきませんが、元興寺伽藍縁起并流記資財帳によると、用明天皇の諱が池辺皇子だったとあります。つまりこの池辺皇子はのちの用明天皇だった。元興寺伽藍縁起并流記資財帳にしか書いてないので、疑う人も多いのですが、用明天皇の名誉に関わることですから、日本書紀では書かなかった、ただそれだけかもしれません。ちなみに用明天皇の宮は磐余池辺雙槻宮で池辺が思い切り入っていて、まー黒でしょう。ところで用明天皇はおそらく最初に仏教を取り入れた天皇です。穢れを嫌う伊勢の少女との恋を阻まれたことが、穢れの概念のない仏教への傾倒だとしたら？……ま、ロマンチックですけど、妄想ですよ。

日本神話・神社まとめ

[「敏達天皇の妃と子息子女\(古事記\)」](#)

[「敏達天皇 \(八\) 皇后と妃と子息子女\(日本書紀\)」](#)

[「敏達天皇 \(十三\) 菟道皇女と池辺皇子\(日本書紀\)」](#)

23.6. 用明天皇紀 橘豊日天皇

前文は 51 文字

👉 天皇は仏法を信じ、神道を尊んだ。 天皇信佛法尊神道

👉 敏達天皇十四年八月 敏達天皇が崩じた。 淳中倉太珠敷天皇崩

👉 九月 天皇は直ちに即位した。宮を磐余にし、池邊雙槻宮と名付けた。以前のように蘇我馬子宿禰を大臣に物部弓削守屋連を大連とした。

天皇即天皇位 宮於磐余 名曰池邊雙槻宮 以蘇我馬子宿禰爲大臣 物部弓削守屋連爲大連 並如故

👉 酢香手姫皇女に伊勢神宮を奉日神祀させた。(・・・後程)

以酢香手姫皇女拜伊勢神宮奉日神祀 (是皇女自此天皇時速干炊屋姫天皇之世 奉日神祀 自退葛城而薨 見炊屋姫天皇紀 或本云 卅七年間奉日神祀自退而薨)

即位の翌年を元年としている。

元年の記事の多くは、これまでは、前文に書かれたものに思える。

👉 元年五月 穴穂部皇子は炊屋姫皇后を奸しようとして殯宮に強引に入った。寵臣の三輪君は逆らって兵衛をよんだ。・・・

穴穂部皇子欲奸炊屋姫皇后而自強入於殯宮。寵臣三輪君逆乃喚兵衛。重口宮門

👉二年四月 磐余河上で新嘗祭を行った。天皇は病にかかり、還って宮中に入った。詔群に三宝に帰依したいと思うといった。

御新嘗於磐余河上 天皇得病還入於宮 群臣侍焉 天皇詔群臣曰 朕思欲歸三寶

👉七月 天皇は殿で崩じた。

天皇崩于大殿

👉磐余池上陵に葬った。

葬于磐余池上陵

省略した国内記事で穴穂部皇子に関する記事が書かれている。系譜を引用している Wiki 「皇室の系図一覧」には穴穂部皇子は書かれていない。

Wiki 「穴穂部皇子」

穴穂部皇子(生年不詳 - 用明天皇 2 年 6 月 7 日(587 年 7 月 17 日))は、飛鳥時代の皇族。欽明天皇の皇子。聖徳太子の叔父でもある。皇位を望み物部守屋と結託したが、蘇我馬子に殺された。

用明天皇は真野長者物語に現れる天皇である。また、和風諡号に豊が用いられている最初の天皇である。

用明天皇の後妃とその皇子皇女

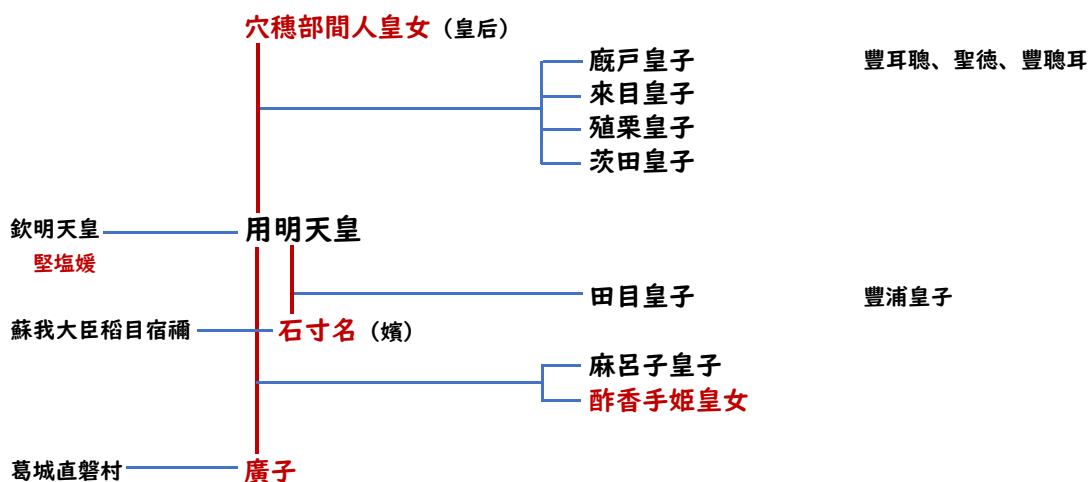


図 23.9A. 用明天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

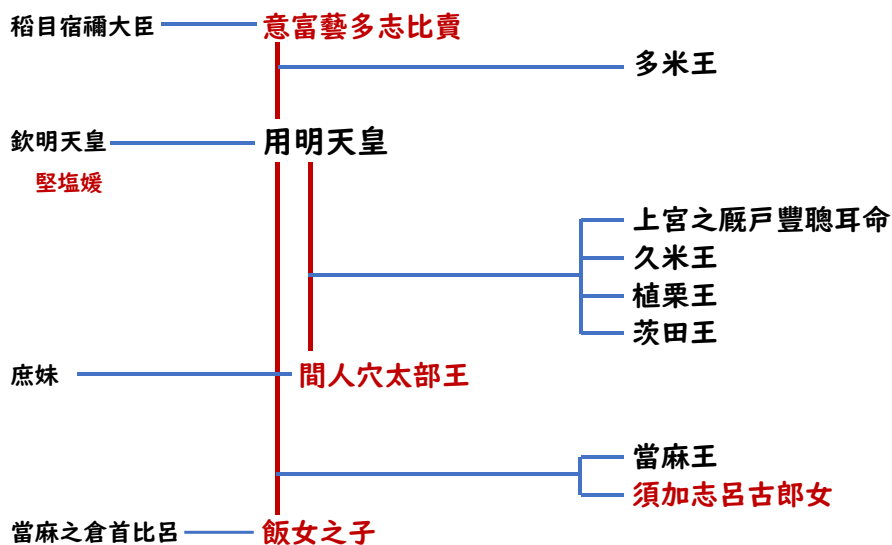


図 23.9B. 用明天皇の後妃とその皇子皇女（古事記）

23.7. 崇峻天皇紀 泊瀬部天皇

前文は 1480 文字

👉 用明天皇二年四月 用明天皇が崩じた。 橘豊日天皇崩

👉 五月 物部大連の軍衆は三度驚いた。大連は、元々、他の皇子を去り、穴穂部皇子を天皇とすることを望んでいた。・・・密かに穴穂部皇子に使いを送り、皇子と淡路で猟をしたいと伝えたが、事は漏洩した。

物部大連軍衆三度驚駭 大連元欲去餘皇子等 而立穴穂部皇子爲天皇 及至於今望
因遊獵而謀替立 密使人於穴穂部皇子曰 願與皇子將馳獵於淡路 謀泄

👉 六月 蘇我馬子宿禰らは炊屋姫尊を奉じ、佐伯連丹經手・土師連磐村・的臣眞嚙をあつめ、兵を選び速やかに穴穂部皇子と宅部皇子誅殺するよう
いった。・・・

蘇我馬子宿禰等奉炊屋姫尊 詔佐伯連丹經手 土師連磐村 的臣眞嚙曰 汝等嚴兵 速
往誅殺穴穂部皇子與宅部皇子 是日夜半 佐伯連丹經手等圍穴穂部皇子宫 於是衛士
先登樓上 擊穴穂部皇肩 皇子落於樓下走入偏室 衛士等舉燭而誅

👉 六月 誅宅部皇子(桧隈天皇の子で、上女王の父である。)を誅し、穴穂部皇子を誅した。(?)

誅宅部皇子 (宅部皇子 桧隈天皇之子 上女王之父也 未詳) 善穴穂部皇子 故誅

Wiki 穴穗部皇子、宅部皇子

善信阿尼受戒

物部守屋大連討伐

👉八月 炊屋姫尊と群臣は天皇となることを勧め、即位した。蘇我馬子宿禰を大臣にするなど卿大夫は旧位を保った。

炊屋姫尊與群臣勸進天皇 即天皇之位 以蘇我馬子宿禰爲大臣如故 卿大夫之位亦如故

👉この月、宮を倉梯にした。

是月 宮於倉梯

ここから記年記事がはじまる。これまでを前文とすれば、前文は 1480 文字で、以下は 900 文字である。

👉元年 この年、百済国は使いとともに、僧惠總・令斤・惠寔らを派遣し、仏舍利献じた。百済国は恩率首信・率益文・那率福富味身らを派遣し、調を進め、仏舍利、僧聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道巖・令開ら、寺工の太良未太・文賈古子、鑪盤博士の將徳白味淳・瓦博士の麻奈文奴・陽貴文陵貴文・昔麻帝彌、畫工の白加を献じた。蘇我馬子宿禰は百済僧らに受戒之法を聞いた。・・・

是歳 百濟國遣使并僧惠總 令斤 惠寔等 獻佛舍利 百濟國遣恩率首信 徳率益文

那率福富味身等進調 并獻佛舍利 僧聆照律師 令威 惠衆 惠宿 道嚴 令開等 寺工太
良未太 文賈古子 鑪盤博士將徳白味淳 瓦博士麻奈文奴 陽貴文陵貴文 昔麻帝彌 畫
工白加 蘇我馬子宿禰請百濟僧等 問受戒之法 以善信尼等付百濟國使恩率首信等 發
遣學問 壤飛鳥衣縫造祖樹葉之家 始作法興寺 此地名飛鳥眞神原 亦名飛鳥苜田
二年 近江臣滿を東山道使として派遣し蝦夷国境を觀させた。完人臣鴈を
東海道に派遣し、浜海諸国国境を觀させた。阿倍臣を北陸道に派遣し、越
ら諸国国境を觀させた。

遣近江臣滿於東山道使觀蝦夷國境遣完人臣鴈於東海道使觀東方濱海諸國境遣阿倍
臣於北陸道使觀越等諸國境

☞三年三月 學問尼の善信らが百濟より還り、桜井寺に住んだ。

學問尼善信等 自百濟還住櫻井寺

☞十月 山に入り、寺の材料を取った。 入山取寺材

☞四年四月 譯語田天皇を磯長陵に葬った。これは妣皇后を葬った陵である。
葬譯語田天皇於磯長陵是其妣皇后所葬之陵也

☞八月 天皇は群臣をあつめて、任那を再見しようと思うが、卿らはどう思
うかといった。群臣は任那官家を再建するのは可であると奏上した。

天皇詔群臣曰 朕思欲建任那 卿等何如 羣臣奏言 可建任那官家 皆同陛下所詔

五年 蘇我馬子宿禰は天皇の詔を聞き、恐れ不愉快となり、人を集め、天
皇を謀弒した。 蘇我馬子宿禰聞天皇所詔 恐嫌於己招聚儻者謀弒天皇

十☞月 この月、大法興寺の佛堂と歩廊を起工した。

👉 天皇を倉梯岡陵に葬った。

是日 葬天皇于倉梯岡陵

👉 驛使を筑紫將軍のところに派遣し、内乱により外事を怠らないように派遣した。

遣驛使於筑紫將軍所曰 依於内亂莫怠外事

これまでは、即位した年の翌年を元年としている。雄略天皇からか
check

古くは、即位した〇〇月を元年〇〇月としてきた。

后妃を前文にまとめるのは

崇峻天皇の後妃とその皇子皇女

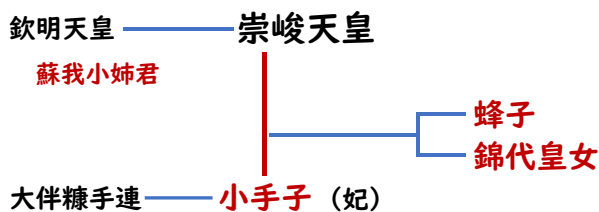


図 23.10A. 崇峻天皇の後妃とその皇子皇女（日本書紀）

古事記 后妃の記事無し

あとがき

倭の東遷をずっと考えてきた。(倭→日本、邪馬台→大和)

16章で扱った雄略天皇紀から武烈天皇紀では、吉備との抗争が見られた。これは吉備から近畿への東遷の痕跡と思われる。本章では、河内から大和への移動の痕跡を探したが、それらしき記事は見つからなかった。強いて挙げれば、陵が河内にあり、宮が桜井にある天皇については、手掛かりになるかと思っている。

12章以降16・17・18章を除いて、日本書紀の記事からの考察から、離れて色々試みたが今一つである。叢書・梁書の倭の五王の記事以降、隋書まで正史に倭の記事がないことも一因である。

図 23.3・図 23.4 では天皇陵と著名な遺跡は書き込まれてるが、本稿にとっては、不十分であり、不要なものも書かれている。